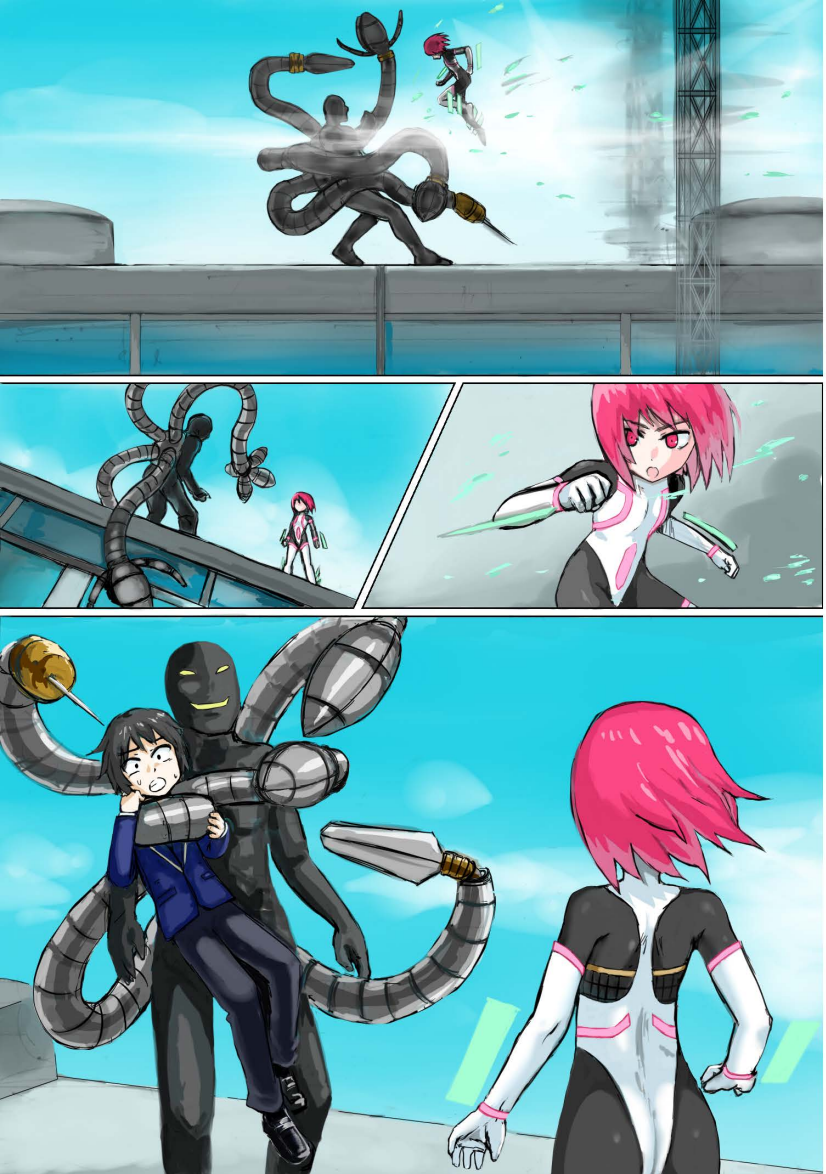
第1話

いつも通り朝の通学電車。いつも通り憂鬱な顔の社会人。いつも通りのメンツの学生。
…彼女はいつもひとりだ。
「夕凪　ころな」――――学業優秀・運動万能・容姿端麗の、完璧美少女だ。紅い髪に、紅い大きな瞳、つんとした表情に、若干のあどけなさが残る可愛らしい顔立ち。
電車ではお婆さんに席を譲ったり、悪い印象はないが、学校では誰とも関わろうとしないんだとか。
確かに学校で彼女が誰かと喋っているところなんて、一度も見たことがない。完璧すぎて近寄りがたいのもあるだろうが、周囲との距離の、一番の理由は多分…

僕が彼女のことを考えていると、電車内に大きな破壊音が響いた。

どうやら爆発で僕たちの乗る電車が破壊されたようだ。周囲がざわめく。
煙の中からあらわれたのは、背中に4本のアームを装備した『怪人』だった。
「ガハハハ！壊してやるぞぉ！人間共ぉ！」
最悪の事態・・・うろたえていると、彼女は怪人の方向へ歩き始める。何か小さく唱えると、その身は光に包まれ、彼女はあっという間に『変身』した。
周囲との距離のワケ…それは
「そこまでだ。その二人から離れなさい。」
彼女は正義のヒロインだからだ。
「出たなぁプロミネンス・・・！まさか貴様がいたとはなぁ～っ！」
黒いインナーに、桜色のエネルギーが流れる白スーツ。腕や脚にはレーザーブレード。
彼女は正義の戦士『プロミネンス』なのだ。
「君、あの二人を頼む。」
「あっ、えっ…ハイッ…！」
いきなり話しかけられ焦ったが、振り返ると僕以外は全員、奥の車両へ退避していた。
僕は怪人に迫られている二人の保護を任されてしまった。
「ここで息の根を止めてやるわぁ！」
怪人のアームがプロミネンスに襲い掛かる。彼女はブレードで受け流し、捨て身のタックルで怪人を車外に突き飛ばした。プロミネンスは戦場を人気の無い場所へと移したのだった。



「あぶねぇあぶねぇ。可愛い顔してエグいことしてくれるじゃねぇか、お嬢ちゃん。」
「通勤電車を狙うなんて、悪い怪人ね。このまま退かないなら、あなたを退治します。」
「へへ…良いねぇ。正義の味方さんよぉ！」
電車の上で壮絶な戦いが繰り広げられる。プロミネンスは襲い来る4本の触手と怪人の体術をかわし、打撃を叩き込む。
（ぐっ…こいつ、強いぞ……！このままでは…　…！）
プロミネンスの力を前に、怪人は焦りだす。
しかし、アームの視覚が車内を捉えると、態度を急変した。
「ま、参ったプロミネンス。俺の負けだ。もう悪さはしねぇよ。」
無抵抗な怪人に、正義の味方は攻撃の手を止める。
「…本当？」
「ああ、本当だとも…」
怪人は迫真の演技で時間を稼ぎ、少しずつアームを車窓に伸ばす…
「全く、正義の味方にはかなわねぇなぁ！」
そして車内から人質を取り出した。
「うっ、うわぁあああああっ！！！！」
「…！」
「ククク、甘い甘い、甘すぎるぞプロミネンス。」
「卑怯者…！」
「じっとしてな。さもないとコイツを落とすぜ。」

怪我人を運んでいる最中に、僕はアームに捕まり、怪人の人質になってしまった。
彼女の足を引っ張ってしまうなんて…。正義の味方が、拘束されていく。
「へへ…今までの分、たっぷりお返ししなくちゃなぁ…」
怪人は彼女に近付くと、腹部に強烈なパンチを喰らわす。
「うっ…!」
拳はプロミネンスの腹部にめり込み、苦しそうな声が上がる。
「ホラホラ、どうしたぁ?正義の味方さんよぉ?」
一発。
「ぐっ!」
また一発、一発。
「はぅっ…!ぅぐうっ…!おぇっ…!」
怪人は的確に鳩尾を突き、プロミネンスを追い詰める。
…正義の味方が、やられてしまう。

年頃の少女が男子の前で嘔吐するなど、これ以上無い恥辱だろう。あまりにもむごい仕打ちに彼女の顔は真っ赤に染まり、目からは生気が失われている。
「よーし、よくがんばったぞプロミネンス。約束どおり、コイツは放してやろう。」
「あっ…あっ…」
散々殴られた余韻で、彼女は受け答えもままならない。吐き終えたばかりで呼吸は荒く、えづきが残る。小さな体はひくつき、可愛らしい顔はとろん、と崩れ、緩んだ口元からは、だらしなく吐瀉物混じりの唾液が垂れ…不本意だが、その表情からは妙な色気を感じてしまう。
「ほら、顔を上げろ、プロミネンス。お前はまだまだ助からないぞ。」
チャキ…
「…、っ…！」
顔を上げると、目の前には数々のアーム…股下に突きつけられたバイブが淫行を予感させる…。プロミネンスの表情はさらに凍りつく。これからまだ凄惨な辱めが続けられるのだろうか。
僕は拘束された彼女を残し、無力にも電車の中へ降ろされていった。

「うっ、んぐっ…、あぁあっ…！」
プロミネンスは延々と股間に電動マッサージ器をあてがわれ、乳首を鋭い針で弄ばれ続けていた。
「へへ…可愛い反応してくれるじゃねぇか。サイコーだぜ？プロミネンス。」
「うっ…くっ…！」
怪人は腋を、腹を、好き放題に愛撫する。手は徐々に胸にまわり、性への慣れが無いころなを焦らせる。
「いっ…いやらしい…っ！」
「そうとも、お前は今、最高にいやらしいことをされているんだ。悪の怪人にな。」
「あっ、あぅう…！」
（い、いやだ、こんなの、私正義の味方なのに…！）
正義の装甲であるはずのスーツを敵に気安く撫でられ、プロミネンスは屈辱を感じる。